

「脳科学と教育」研究に関する検討の中間取りまとめ(概要)

平成14年 7月
「脳科学と教育」研究に関する検討会

「脳科学と教育」研究の目的：人が本来有している能力の健やかな発達・成長や維持を目指すこと及びその障害を取り除くこと

本研究において「教育」とは、人の胎児期を含む生涯を通じた教育、即ち、乳幼児教育、小・中・高等学校教育、高等教育、高齢者教育、また、職業人を対象とした新たなスキル修得等のための能力開発や再教育、さらには、リハビリテーション、語学教育、芸術教育等を包含した広義の概念として取扱うものである。

背景

- 近年、人の脳の非侵襲計測が実現
分子生物学、医学、行動学等を基盤とした脳に関する研究の進展
- 学習のメカニズムを明らかにし、人の能力の発達・成長や維持及びその障害を取り除く「脳科学と教育」研究が可能となった
- 幼児期・若年期における脳の発達と学習方法、老年期における脳機能の維持等に関する脳科学からの知見の蓄積に基づいて、教育関係者が長い経験によって得た暗黙知を、脳科学によって顕在知とするにより、育児や学習指導に関する重要な考え方が得られると期待
- 経済協力開発機構教育研究革新センター (OECD/CERI) により「学習科学と脳研究」プロジェクトが推進中
第I期 (1999~2002) プレーンストーミング
第II期 (2002.4~)
脳の発達と生涯に亘る学習 (日本による調整)
脳の発達と算術能力 (英国による調整)
脳の発達と読み書き能力 (米国による調整)
- 米国は学習研究を積極的に推進

留意事項

- 倫理的配慮**
人間の尊厳や個人のプライバシー 保護等
- 社会の理解と協力**
正確かつ解りやすい情報発信
- 研究の成果の取扱い**
総合的かつ慎重な検討が必要

研究

基本的考え方:

- 教育サイドからの課題の提示に対して、脳に関する科学が如何なる貢献ができるかとの観点からの対話・交流を進めつつ、研究を実施することを基本
- 脳科学、教育学、保育学、心理学、社会学、行動発達学、医学、生理学等の関係する科学技術と架橋・融合し、新たな視点に立った取り組みにより研究を推進
- 産学官の多数の研究機関がそれぞれの特色を活かしつつ、広範かつ多様な研究を展開し得る、総合的な研究体制を構築

